

## ナサニエル・ホーソーンとC. G. ユング 〈I〉

——「父なるもの」と「母なるもの」を中心とした比較考察——

### Nathaniel Hawthorne and C. G. Jung 〈I〉

—— Their Relations to 'Paternity' and 'Maternity' ——

高 島 まり子

Mariko TAKASHIMA

#### <序>

これまで、C. G. Jung (1875-1961) の心理学の概念を用いて Nathaniel Hawthorne (1804-1864) 作品の解釈を様々に試みてきた。それは、父元型や母元型、アニマ、アニムス等の元型や「夜の航海」に代表される「個性化過程」といったユング心理学の概念の文学的表現がホーソーン作品に色濃く見出されると考えたからである。<sup>1</sup> が、ユング心理学とユング自身の内面世界を切り離して考えることはできない。なぜなら、独創的なユングの心理学は何よりも経験の学問であり、彼自身の体験——19世紀末から20世紀にかけてのヨーロッパという時空における文化的・思想的背景から家族関係の影響、そして夢や幻視、想像といった最も個人的な体験に至るまで——と不可分に結びついたものであるからだ。したがって、ユング心理学を生み出した土壌である彼の人生経験を、主にその内面世界を中心に考察し、ホーソーンの場合と比較することは、ホーソーンとその作品をより深く理解するための何らかの手がかりを与えてくれるのではなかろうか。というのは、ホーソーンは人間の深層心理を描いた作家であり、鋭い心理的洞察力を備えた彼の内面世界もまた作品と切り離すことはできないと思われるからだ。しかしながら、ユングの膨大な哲学的・心理学的思想やホーソーンの全人生を辿ることはもとより筆者の能力を超えることであるので、本稿では2人の幼・少年期を中心に人生の基礎を成す事柄に的を絞る、元型的な「父なるもの」と「母なるもの」との関係を中心に考察することにする。

#### <1> 「父なるもの」との関係

ものごころもつかない3歳の時に父親を亡くして以来、母子家庭で育ったホーソーンにとって、父親は常に「不在」であった。確固とした父性の欠如が繊細な作家の心に投げかけた影の大きさは、計り知れないものがある。その穴を埋めるべく、母子家庭になった一家の生活の一切の世話をした母方の叔父ロバート・マニングは、ホーソーンの「父親代理」であるが、少年ホーソーンにとっては、自らの作家志望を無視し、実務家としての望まぬ将来を押しつけてくる敵のように思われた節

がある。グロリア・C・アーリッヒが『蜘蛛の呪縛——ホーソンとその親族——』で指摘するように、ロバートはチリングワース、ピンチョン判事、ラパチニといった悪役のモデルと考えられるし、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」などの主人公の「父親代理」に対する「罪意識」は彼へのエディプス・コンプレックスの投影かも知れない。(166, 190-220) ただ、ロバートへの反感は、本来彼の個人的性格やフロイト的な理論に全てを帰すべきものではなかろう。むしろ、幼い甥を自分のベッドで寝かすという具合に、叔父は男性同士の共感を持って甥を育てようとした節があるからだ。大杉博昭氏が述べるように、作家が憎んだのは叔父その人というより、作家の意志に反して彼をマニング家の家業を継ぐ実業家にしようとした叔父の「有能な実業家像」(『灯心記——ナサニエルの選択』207) だったのかもしれない。そしてまた、この人間関係に元型的な布置も見て取れるのだ。私見によれば、拙論1で論じたように、叔父がモデルと考えられるチリングワースの人物像の否定面(彼には隠された肯定面もあり、最後には「神の使者」ナタンとして現れるが)に、様々な点で意識発達段階上の母権制における「恐ろしい男性」元型のイメージが投影されているがゆえに、彼は「息子=自我」ディムズデルに対して「太母」の手先である否定的な「地父」の役割を果たしていると考えられるからである。エリッヒ・ノイマンは、『意識の起源史』において、この「恐ろしい男性」像は文化的に層を成していて、父親の権威が確立されていない母権制の心理を象徴する神話においては、危険な動物や神官、母権的権威を支える「母方の叔父」、あるいは大地的な「地父」として、そして後に父権的な意識発達段階においては克服すべき古い精神的権威を担う「精神父」として現われ、少年期の「自我=英雄」を脅かすのだと言う。(255-66) したがって19世紀の父権制社会においても、父親の欠けた母子家庭のいわば母権的状况にあって、「少年=自我」ホーソンの敵意の対象となったのが、母親を支える立場から全権を握る「母方の叔父」ロバートであったことは、元型的布置という視点から見ても不自然ではないのである。しかも、偶然とはいえ、彼が実務家であると同時に大規模な果樹の品種改良に取り組むホーソンの科学者(自然界の異種混交を企てる一種の悪魔的な神への反逆者)ともいえる一面を持っていたことは、更にその元型的布置を活性化させたに違いない。なぜなら、物質や大地との結びつきは母権的・地上的価値観を体現する「地父」タイプの父親像の属性だからである。即ち、ロバートは「父親代理」という表面的役割のゆえにここで論じたが、作家にとって元型的には「太母」圏に属す存在であると同時に、現実には「母なるもの」が君臨する世界から「父なるもの」を中心とする世界への過渡期に属す権威であるか、あるいは両者が融合した人物像であると言えよう。ホーソンは、結局叔父の意図を裏切って作家になり、叔父の葬式にも出席しなかったという。(アーリッヒ220)

さて、ロバートへの屈折した反感と表裏一体を成すのが、父方のピューリタンの先祖——『緋文字』の序文である「税関」にも直接描かれている、クエイカー教徒の迫害と魔女裁判で悪名高いウィリアム・ホーソンとその息子ジョン——への親近感である。彼らは17世紀のピューリタン神権体制の支配階級に属し、軍人、立法者、裁判官として君臨した。「税関」において作者は、前者を「彼の善行の数はずっと多くとも、そのどんな記録よりも、残虐行為の事件のほうが長く残るのではないだろうか」、後者を「(魔女)たちの血が彼に汚点を残したと言ってもさしつかえないほどである」と厳しく批判し、彼らの招いた呪いが一族の零落の原因であると見なし、自ら先祖の恥を背

負うことによってその呪いが取り除かれることを祈っている。<sup>2</sup> いわば先祖の遺した重い課題を解決すべく、200年もの時の隔たりにも拘わらず彼らの存在との強い絆を——たとえ批判や反感が前面に出ていようと——意識しているのだ。

しかしながら、その絆は否定的なものばかりではない。彼は、自分のどんな成功も祖先にとっては無価値に見えるだろうと考え、次のように彼らの言葉を想像する。

「小説本の作家だって！それが人生にどんな役割があるのだろうか——神の栄光を讃えることができるのか、あるいは生きているあいだに人類に仕えることができるか？いや、あんな墮落したやつはバイオリン弾きにでもなった方がいいんだ！」(SL10)

ここにはユーモアと冷笑的な自己卑下と作家としてのプライドがないまぜになると同時に、先祖の想像力の欠如と偏狭な精神への作家の皮肉っぽい批判が彼らの篤い信仰心や同胞に対する忠誠心への羨望と溶け合っているようだ。実際、「白髪 of 戦士」を始めとするいくつかの短編には、自らの信仰と自由独立のために毅然として戦い、合衆国建国の基礎造りに貢献した堂々たるピューリタンの肯定的イメージが見出されるし、『緋文字』のピューリタン像にもその価値観と権威への作家の共感が含まれており、ホーソンがそのような面を自身の先祖にも認めていることは否定できない。即ち、作家は両義的な感情を伴った強い精神的絆でこの高名な先祖と結ばれていたと言えよう。このように、作家の「父なるもの」との関係の特徴として挙げられるのは、父親の不在、母方の叔父への反感、そして強烈な父性を持つ父方の先祖への親近感である。ところで、これらの特徴がユングにも見られるのは興味深いことではなからうか。

確かにユングの父は彼が20歳の時に亡くなったのであり、その時点まで現実には決して「不在」ではなかった。この点はホーソンとは違う。しかし、謙虚で善良なプロテスタントの牧師でありながら、彼は信仰に疑念を抱きつつそれに直面する勇気を持たずに苦悩し、息子にとって確固とした父親モデルとはなり得なかったのである。『ユング自伝——思い出・夢・思想』(以下『自伝』と略記。)によれば、既に3歳にして驚異的な「ファロスの夢」<sup>3</sup>を見たり12歳で凄まじい「大聖堂体験」<sup>4</sup>を経て、神を自らの体験の中で最も確実に直接的なものと認識していたユングにしてみれば、神との生きた関係を持たない父親に何とか神に直面して欲しいと願ったのは当然であり、何度も議論を試みたらしいが無駄に終わったという。最後まで信頼するに足る価値観を見出せず、息子に迫られても明確な答えを与えられない父親は存在感が薄く、精神的な意味ではホーソンの父同様に「不在」だったとも考えられよう。

父親はそのような空虚な状態のまま、ユングが大学1年の時に亡くなった。まだ自立への準備に取り掛かったばかりの息子は経済的に困り、母方の叔父の援助によって学問を続け、医師として自立することができたという。(チャレット『ユングとスピリチュアリズム』213, 225) ホーソン同様に、成人前に父親を亡くして母方の叔父に経済的に依存したとはいえ、それはごく短期間であり、既に大人の年齢であったユングには、母方の叔父の影響力はホーソンの場合とは比較にならぬ弱いものであり、それほど反感や憎悪の対象にはなり得なかったとも思われる。しかしながら

興味深いことに、ユングは自伝で学費を払ってくれたのは父方の叔父であったと主張しており（『自伝』① 147）、母方の親族の証言と明らかに食い違う。住んでいたバーゼルでは母方のプライスヴェルク家は古い名家であり、父方のユング家より優勢であって、ホーソーンの場合と同じく、父親の死後は彼らが住居を含むすべての面で母親と妹の面倒も見たという。ところが、ユングもまた作家同様に彼らがパトロニックな支配力を及ぼしてくるのが不愉快であったらしく、学位論文作成のための交霊会の実験を妨害されたことにも憤慨して反抗し、論文の中で彼らのプロフィールを情け容赦なく描いている。（チャレット213-5）

父親への幻滅と叔父を含む母方の親族全体への反感を補償するかのようになり、ユングは自分が生れる前に亡くなった父方の祖父に強い絆を感じている。ユングと同名の祖父カール・グスタフ・ユング（1794-1864）はフランクフルトに近いマインツに生まれて医師となったが、18世紀以来のゲルマン愛国主義と結びついた敬虔主義の熱狂の中でカトリックから福音派プロテスタントに改宗し、1817年ドイツ統一を求める行事ヴァルトブルグ祭に参加したことに関連して投獄、追放された後、パリに脱出した際フンボルトの知遇を得て、彼の推薦によって1822年スイスのバーゼル大学医学部に職を得た。彼は医学部教授から学長になり、大学施設と教育の近代化に成功し、バーゼルの伝説的人物となった。そして、優れた人格者として多くの社会的貢献を成し遂げたといわれているが、中でも精神障害を持った子供達のための「バーゼル希望協会」の設立にあたり、その趣旨を次のように述べている。「私はありきたりの精神科の病院を構想しているわけではありません。…あらゆる患者を受け入れることができ、そうした方々を心的方法をもって癒すことに取り組めるような病院ができないものかと考えているのです。」（チャレット95）この言葉は、孫のユングに大きい影響を与えた祖父の姿を浮き彫りにしているように思われる。ユングは若い頃、この祖父の伝説と自分を常に比べていたらしいが、大学入学時での専攻決定に悩んだ時、天啓のように医師の道がひらめいたのも偉大な祖父との同一視が強く働いたのではなからうか。彼は祖父の跡を継ぐかのように、バーゼル大学医学部に進むことになるのだ。

この祖父との同一視を更に強めた重大な要因は、祖父が文豪ゲーテの私生児ではないかというユング家に伝わる噂である。即ち、先祖フランツ・ユングの妻ゾフィーとゲーテとのロマンスによって生まれたのが祖父であるという話なのだが、この真偽についてユングは曖昧な態度をとっていたといわれている。しかし、フロイトへの手紙にはこれを事実と認め、曾祖父としてのゲーテに言及しているという。（チャレット93）学生時代に『ファウスト』を読んでファウストとメフィストフェレスの二項対立をまさに自分自身のことだと強烈に感じ、「私の名付け親と権威とは偉大なゲーテその人だった」（『自伝』① 134）と述べた彼にしてみれば、祖父を介したゲーテとの血縁関係を示唆する確たる根拠のない噂も、心理的な現実と受け止められたかもしれない。また、頼りない実父への失望感も偉大な祖父との同一視をそれだけ強め、祖父とよく似た気質の天才ゲーテを血縁とみなす噂を一段と魅力的なものに見せたに違いない。<sup>5</sup> 以上のように、ユングに見られる祖父への同一視と心理的な曾祖父とも言えるゲーテへの崇敬に満ちた親近感とは、ホーソーンがピューリタンの先祖に抱いた両義的な感情と質的にかなり異なっている。しかしながら、男性が自立していくうえで常に指標となるべき大きな社会的役割を果たした父親／父権的男性像という意味で、二人に

として父方の先祖の果たした役割と彼らとの精神的絆にはかなり共通点があり、この父親像の重要性は計り知れないと言えよう。そこには、現実の父権的価値観に飽き足らない「息子=自我」が、新たな価値観を模索する際に過去の偉大なる父親像にその基準を求める姿があると言えよう。そして、ある時空を代表するような偉大な個人の場合には、そのような個人的状況は、その時代における特定の地域全体の集合的意識の行き詰まりを反映しているのかもしれない。この問題については後述したい。

## ＜2＞「母なるもの」との関係

進路に悩んでいた頃、ホーソーンは「僕はどうして女の子に生まれつかなかったのでしょうか。そうすれば、一生お母さんのエプロンに、ピンで留めておいてもらえたでしょうに」（1820年3月7日付け）と手紙で嘆くほどで、実母への依存が強かったことが窺われる。レスリー・フィードラーも、フロイト理論のエディプス的な状況を『緋文字』の三角関係に見出しており、彼が作品に描いたのは「彼自身の良心の危機であり、ヘスターの中に投影された彼自身の女性体験である」（*Love and Death in the American Novel* 232）と述べる。私見では、作品の状況にエディプス理論を認めることはできないが、ヘスターを母親像と捉えることは妥当だと思われる。また、原作の執筆中に死の床にあった母を毎日見ていた作家は、「母性的なものの神秘を感知した」（同）と述べ、作品へのその影響を暗示する。男性的自我の独立を果たすためには、誰も「母なるもの」と訣別し、自我を無意識の中へ溶解させようとする「太母」の否定的支配力から解放されなければならないが、作家は『緋文字』執筆によってその解放を成し遂げたとも考えられる。

さて、彼にとってこのような「太母」の支配力を意味する「母なるもの」は、むしろ現実の母親の影響力にとどまらない。例えば、フィリップ・ヤングは作家の姉エリザベスと妹ルイザとの三角関係を想定し、彼の作品に現われるこの二種類の女性の対立をそれに結び付けるばかりでなく、作家の生涯にわたる近親相姦のテーマと関連させて、姉との間にそれを疑っている。（*Hawthorne's Secret*）姉エリザベスは、ダーク・レディー的な風貌の非常に知的な母譲りの美女で、作家の結婚に強硬に反対し、後までも決して許そうとしなかったという。確かに作家の実の子供達が察するほどの「濃密なく近親相姦」的雰囲気（神徳昭甫『光と円環』182）が彼らの間にあったにせよ、作品に現われる近親相姦のテーマは、アーリッヒによればゴシック・ロマンスの中心テーマである「兄弟姉妹間の相姦関係」という「文学遺産」が「家族体験によって増幅されたもの」であるという。（159）大学卒業後の母と姉妹に囲まれた長い独身生活ときわめて閉鎖的な環境にあって、濃密な親近感に結ばれた姉と弟の関係に、作家がひきつけられながらも罪悪感を抱くのは自然な成り行きであろう。事実の如何より、彼が姉のような知的な美女に対する憧れを罪深いものとして危険視し、その恐怖感や罪悪感をダーク・レディーのイメージに投影したことの方が重要である。母子家庭における唯一の男性であったホーソーンが、閉ざされた家庭の中で母や姉の引力を魅惑的であると同時に罪深い「母なるもの」の支配力と捉えたとしても無理はない。父親の不在はその支配力を一層強める働きをしたに違いない。

更に母方のマニング家の過去には、岩田強氏が詳述するように近親相姦の事実があったとされる。(153-97) 1681年にアンスチス・マニングと妹のマーガレットは、兄ニコラスとの近親相姦の罪によりヘスターのように公衆の面前で晒し台に立たされていた。現存する法廷記録によると、ニコラスの非常に動物的な人物像が浮かびあがる。岩田氏は、作家が父方の先祖については言及しても母方の近親相姦事件については黙秘を通したことを、「口にださうる感情はむしろ根があさいとも言える」と評するが、作家の拘りは過去の罪の事実に向けられたばかりではあるまい。母方の先祖の近親相姦の忌まわしいイメージは、母や姉の濃密な情愛が醸し出す「母なるもの」に一段と原初的な暗い色合いを加えたことであろう。「太母」像で表わされる無意識の支配力への元型的な陶醉とそれを上回る反発は、自立を目指す「息子=自我」にとっては普遍的な心理であるが、ホーソーンの場合は、母方の先祖の近親相姦への嫌悪と姉妹や母への両義的感情という私的要因と結び付いて、その心理は一層強められたに違いない。しかも、この近親相姦事件を巡って父方と母方の先祖が裁く者と裁かれる者として対立していたという事実は、作家にとって「父なるもの」と「母なるもの」との元型的・普遍的対立を個人的レベルで象徴しているかのようで興味深い。私見によればこの対立は、『緋文字』の冒頭の場面——姦婦ヘスターと彼女を裁くピューリタン支配階級が相対している場面——に表象されているし、両者の統合は彼女とディムズデルの「森」への往復に象徴される「個性化過程」によってもたらされたと考えられる。一般的には、ホーソーンにおけるこの対立と和解は、『七破風の屋敷』に2つの家系の対立とその子孫の結婚という形で描かれたと見なされている。

ではユングの場合は、原初的な「母なるもの」の元型的魅惑とそれへの抵抗はどのように体験されたのかを、同じく母親や母方の先祖との関係からみていきたい。彼の母親エミーリエは、バーゼル教会の主任牧師ザムエル・プライスヴェルクの娘で、際立った霊媒的な気質を両親から受け継ぎ、2つの人格に分裂する傾向を息子と共有していた。即ち、日常の優しい常識的な人格と、予期せぬ時に顔を出して透徹した洞察を示す不気味な人格である。ユングによれば、後者は「風変わりな動物でもある千里眼をもった予言者のようであり、また熊の穴の中にいる尼僧のようでもあった。原始的で無情——真理や自然のように無情」(『自伝』① 81)なのであり、「母は深い、目に見えない大地に根を下ろしていた」(同138)のである。まさに後のユング心理学における「太母」イメージを連想させるような人格であるが、この母親の内的分裂は幼いユングに強烈な不安夢を見させるほどの恐れを引起すと同時に、場合によっては深い知恵や支えを与えてくれるものでもあったらしい。そしてユングが彼自身のいわゆる「人格 No.1」——他人の目に映る現実の彼自身で、内的にはほぼ自我に一致するもの——と「人格 No.2」——自然や神の世界に近い老人で、あらゆる超人間的なことに属しており、「透徹した生命力であり、生れ、生き、死に、あらゆるものが一体となっている生命の全体的な像そのもの」(『自伝』① 133-4)——の2つの人格を明確に自覚する契機となったのである。彼が成長するにつれて、その分裂の意味の探求と分裂の修復が大きな課題となるに及んで、同じような分裂を共有する母は、不安の源ではなく相談相手や心の支えとなっていったようである。信仰の問題で悩んでいる彼に、突然ゲーテの『ファウスト』を読むように勧めたのは母の「人格 No.2」であり、また内的分裂に関連してスピリチュアリズムを博士論文のテーマに選んだ彼

が交霊会を行なうのを支援したのも母であった。

それゆえ、ユングが母親個人に反感を募らせた証拠は見当たらない。しかしながら、「父なるもの」との関わりについて既に述べたように、母方の親族に対する彼の反感は凄まじく、経済的自立を目前とした学位論文の作成において、彼らの人物像を奇矯、痴愚、変人、ひねくれ者、精神病質、ヒステリー等といった具合に実に冷酷に描き出している。渡辺学氏がチャレットの著書の解説に、富裕な家の娘エンマとの結婚により母方の親族からの援助が不要になったユングが、「恩を仇で返すかのごとく・・・絶交状を叩き付け」たのが学位論文である(416)、と述べるのも説得力がある。『自伝』によれば、父親が死んだ時、ユングが大学を辞めて収入を得る道を選ぶべきだと言った母方の親戚が数名いたらしく(① 147)、それを恨んだ結果かもしれないが、論文作成に必要な交霊会の霊媒が母方の従姉妹ヘリー・プライスヴェルクであり、彼女に多くを負った論文であることを考えると、そのような侮蔑的記述は行き過ぎた行為と言わざるを得ない。後に論文を読んだ母方の親族は、彼に学費を出したことを後悔し、論文の話は親族の間でタブーになったという。(チャレット215, ノル『ユングという名の<神>』80) もともと自分の人格の分裂を理解し修復したいというユングの内的要請に迫られて取り組んだ研究であり、ヘリーもまた同様の分裂を持っていたし、彼自身の霊媒的な能力は母を含む母方の親族には非常に顕著に見出されるものであった。したがって、この事件の顛末は、彼の内なる「母なるもの」への未熟な一種の訣別と言えるかもしれない。もっとも論文の学問的趣旨は、スピリチュアリズムにおける心霊現象を宗教的視点でなく哲学的考察に基づく心理学的視点で捉え直し、後の元型理論や「個性化過程」の概念を先取りしたものであるがゆえに、確かに彼の分裂を建設的に解決する道を拓いたのである。即ち、彼はこの研究によって初めて無意識から独立した人格が形成される過程を観察することができたわけで、「母なるもの」に結びついた超常現象や無意識の自律性、「人格 No.2」といった神秘的な事柄を父権的意識によって理解し、科学的に把握する方向に踏み出したと考えられるからである。換言すれば、母方の親族への表面的対応が未熟なのに比べて、この研究そのものは「母なるもの」からの「息子=自我」の自立の第一歩であり、問題に対するより成熟した対応だと言えよう。それは、ホーソンが現実には叔父ロバートに対してとった冷たい態度に比較して、彼を作中人物の造型に生かした芸術活動は遙かに洗練された対応であったのに等しいと言えるかもしれない。

### <3> 「父なるもの」と「母なるもの」の対立と和解

さて、ホーソンとユングを「父なるもの」と「母なるもの」の対立という観点から少し詳しく考察したい。この対立は、男性と女性、意識と無意識、文化と自然といった様々な対立と共に、人間存在の根幹に関わる最も本質的な問題の一つであろう。彼ら2人にとっても、この対立は自らのアイデンティティを巻き込んだ人生の根本的価値観に関わるものであった。ホーソンの場合、父の「不在」と母方の叔父——本来叔父の支配力は、元型的には「母なるもの」に属すのだが——の存在が事態を見えにくくしているが、この対立は個人的にはピューリタンの価値観と母、姉妹、母方の先祖にまつわる性的イメージの複合体との対立として、また、現実と想像の世界、頭と心、実

学と芸術といった対立として体験され、作品中ではテキスト『緋文字』におけるピューリタン「共同体」とヘスターの対立に明らかであり、一族の歴史においては近親相姦を犯した母方の先祖と裁判官であった父方の先祖の対立に見出されるとも言えそうである。そして、その和解はロマンス作家としての創造行為そのものの中に象徴的に含まれていたし、また作家は作品のプロットの中にそれを実現しようとした。近親相姦事件から数世代を経た後に、対立していた両家の末裔、即ち作家の父母が結婚したという現実も、象徴的な和解の一つと考えられるかもしれない。

ユングの場合も、この対立と和解は生涯をかけた心理学の理論の構築と心理療法の実践という仕事にはっきりと表われている。父がプロテスタントの牧師でありながら、自らの空虚さのために息子にとって確固とした父親像になり得なかったことは既に述べた。このような形の父の「不在」によって、ユングは、出発点から伝統的キリスト教を自らの価値基準とは成し得なかったのである。代わりに凄まじい夢や幻視によっていきいきと体験した両義的な——慈悲深く、また恐るべき——神イメージに圧倒されると共に、その神に寄り添うかのような内なる「人格 No.2」の時空を超えた性質をよりどころとするようになった。これらの人格分裂や霊的体験は母と共有する世界ではあるが、彼は現実の生活と自らの内面的世界の分裂がもたらす葛藤に苦悩を深め、ついにはキリスト教に代わる新たな父権的価値を「母なるもの」を素材として自らの手で創造せねばならなかったのである。そのためには、これらの内面的体験を説明し得る宗教的枠組みを求めざるを得ず、当時のスピリチュアリズムにそれを見出し、過去に父方の祖父が教えていたバーゼル大学の医学生としてその科学研究に没頭したのである。それは、いわば、「母なるもの／無意識／スピリチュアリズム」を、彼が同一視していた祖父が代表する「父なるもの／意識／科学」によって解明し、新たな価値観を生み出そうとした営みとも言えるのではなからうか。彼をこの知的努力へと追いやったのが、父の精神的「不在」に起因する「父なるもの」の弱さと、それに満たされない「母なるもの」の強烈な影響力であったことは明らかで、現実にも両親は不和であった。母は息子を溺愛した反面、彼が3歳の頃には夫婦間の不和が原因で長く入院して彼を不安に陥れ、7歳の頃には家庭の空気の息苦しさが彼を喘息で苦しめたという。更に過去を辿れば、彼の理想的父親像であった父方の祖父は、交霊会を「馬鹿げたこと」(チャレット56)と批判し、ヘリーの指導霊として現れた母方の祖父とは相容れなかったようで、ユングは二人が「互いのことを辛抱できなかった」と思っていたらしい。(ノル45) このように、現実においても元型的にも「父なるもの」と「母なるもの」が鋭く対立する中で、自らの立脚すべき価値基準を獲得するための知的探求の過程は、ユングにとって「父なるもの」と「母なるもの」の一種の統合の試みとも考えられるのではなからうか。そして、その知的努力は、彼の内面において輝かしい優位を誇っていた「人格 No.2」と現実の自分に近いみすぼらしかった「人格 No.1」の関係を、逆転させることとなったのである。

それは、既に15-6歳の頃の「カンテラの夢」に象徴的に表される。夢の中で、彼は夜の暗闇の深いもやの中を強風に逆らって小さな明かりを手で守りながら前進しているのだが、その明かりで暗いもやに映った自分自身の大きな黒い影が背後から追ってくるのに気づく。彼は、小さな明かりが自分の意識であり、暗闇のもつ強大な力に比べてきわめて弱いにせよ、自分の持つ唯一の宝であることを悟ったのである。この夢は、「人格 No.1」が光の運搬人であり、透徹した生命力である強大



な化け物の如き霊「人格 No.2」の一部に過ぎないが、後者は前者に影のように従っているものであり、意識の明かりを守ることこそ自分の仕事であるということに彼に教えたのである。それ以来、彼は自らを「人格 No.1」と同一視するようになり、それまで光り輝いていた「人格 No.2」は内なる他者となり、みすばらしかった「人格 No.1」が光を守る側として急速に成長していくことになったという。(『自伝』① 135-7) 彼は後に、この「人格 No.2」を集会的無意識として理論化することになるのだが、「自我=意識」の守護者としての「人格 No.1」を支えたものが「父なるもの」に属す自然・人文科学という精神的文化の力であったことは明らかである。『自伝』やチャレットの著書、あるいは林道義氏の『ユング思想の真髓』によれば、この過程で「人格 No.1」が用いた父性原理としての科学は、主としてカントとショーペンハウエルの哲学に始まり、オイゲン・ブロイラーやジャネに代表される精神医学、フロイトの精神分析を含む広範な心理学、更にはグノーシス主義や錬金術を含む様々な神秘主義の研究にまで至るのだが、それに対応して父親像の投影対象も最初の上司ブロイラーからフロイト、彼と訣別してからはテオドール・フルールノワ（スイスの心理学者・心霊研究者）へと移行していった。そして最終的には、彼らと現実の父のイメージが合体してユングの「自己」元型像である想像上のフィレモン像——ユングが描いた彼の像がフロイトに非常に似ているのは有名な話であるが、ユングはフィレモンに関連して父の夢も見ている——へと人格化され、彼はフィレモンから深い知恵を授けられたという。(『自伝』① 107-15, 261-65, チャレット131-60, 331-52, 林23-35) これは、ユングの無意識から浮かび上がってきた「父なるもの」の至高の姿であり、彼の「自我=意識」を象徴する「人格 No.1」は自らの研究を支えてきた「父なるもの/意識」と研究対象であった「母なるもの/集会的無意識」との共同作業によって、フィレモンのイメージを生み出したのである。したがって、「母なるもの」と「父なるもの」の和解、あるいは統合は、フィレモン像の形においても既に一つの達成をみたのだと言えよう。

では、ホーソーンはこのような「自己」を象徴する父親像を持っていたのだろうか。彼はテキスト『緋文字』においてヘスターとディムズデイルの「個性化過程」を描いたというのが筆者の見解であるが、作家の自画像と思われる牧師は、確かに「模範とすべき父親/自己」像を与えられている。牧師の「夜の航海」の後半を導いた彼の「内なる神」が、それに当たるのではなかろうか。(拙論8参照) この神は、彼を通して姦婦ヘスターに聖母的なイメージを与えることを許し、拙論3に論じたように「悪魔」チリングワースを神の使者ナタンへと反転させて救済の可能性を示し、同時に彼を介して牧師の罪を厳しく断罪したばかりでなく、彼に真の懺悔の決意をもたらしてユング的「自己実現」と救済へと導いたのである。一方、ホーソーンの分身である「税関」の「語り手」は、作家としてのアイデンティティを抑圧し、生活のためにセイラム税関に勤務する憂鬱な毎日を描写している。テキスト『緋文字』における牧師の勝利は、そのような閉塞的状况を打破せんとする作家自身の「自己実現」の文学的表現でもあったであろう。その際、作家は想像力の麻痺を脱してロマンス創作、即ち「自己実現」を可能たらしめた契機として、自らを導く肯定的な父親像を登場させる。それは、過去の実在の税関監督官、ジョナサン・ピューの亡霊である。亡霊は自らを「語り手」の「役職上の先祖」と見なし、「彼に対する子としての義務と尊敬を神聖に考えて」(SL33) 彼の書き遺したヘスターの生涯の物語を世間に出すようにと命じ、「語り手」はそれに忠

実に従ったというのである。即ち、「語り手」／ホーソーンは、偉大な「父親」ピュー氏に「息子」として霊的に直結することによって、ディムズデルと同様に一人の独立した男性として父権的価値の世界に参入すると共に、文筆家としての彼から「作家」というアイデンティティを継承したのである。「税関」にも、実際に想像力を鈍らせる税関勤務を免職になり（象徴的には、実利的な母方の叔父の支配力を脱し）、父方の祖先の影響力のもとにある故郷セイレムをあとにして、即ち2種の「父親代理」から解放されて——現実には、母の死によって「母なるもの」にも象徴的な訣別を果たし——、テキスト『緋文字』の執筆によって自立した「作家」としてロゴスの世界に再生する「語り手」の姿が描かれる。ピュー氏は、いわば作家の精神的な死と再生を司る内なる神、即ち、「自己」であると言えよう。しかしながら、父を3歳で亡くし、ユングのように現実の尊敬すべき父親的人物とも出会わなかったホーソーンが、ピュー氏の顔を描けなかったのは当然かもしれない。

さて、ここでピュー氏の父性の質を、「父なるもの」と「母なるもの」の統合という視点からユングの「父親／自己」イメージと比較しながら考えてみたい。彼は日常業務が行なわれている税関の一階ではなく、無用になった過去の書類や資料が雑然と保管されている二階の非現実的な空間に亡霊として現われるのだが、この場面はフロイトとの訣別を予言するユングのある夢を思い起こさせる。（『自伝』① 234-5）夢の中で、スイスとオーストリアの国境にある税関に、既に死んだのだが「まだうまく往生できないでいる」検査官の亡霊が、気難しく腹を立てた様子で登場するのだ。国境、つまり2つの国の「境界」について、ユングは一方で自分とフロイトとの、他方では意識と無意識との境界を想起した。即ち、この検査官はフロイトであり、意識と無意識を隔てる境界線上で、「税関の検査」（精神分析）によって「密輸品」——意識を脅かす性的な無意識内容の影響力や、意識から抑圧されて無意識へと追いやられた内容を指すと思われる——を取り締まり、「無意識の仮定」を発見したのであるが、「世間の嫌な面を見たということだけで嬉しく、かつ満足げであった。」当時、ユングは「人間の心の一種の構造的図式」と「個人的なところの下に先験的に存在している集合的な心」（『自伝』① 232）の存在を暗示する夢——自分の家に18世紀ロココ様式の二階、15・6世紀の一階、ローマ時代の地下室、その下の先史時代の洞窟が層になっているのを発見する夢——を見て、後に集合的無意識と呼ばれることになる非個人的な無意識層が存在することを直観し、それを裏付けるような古代神話やグノーシス主義の研究に没頭していた。そんな彼にとって、人間の性は生物学的意味を超えた霊的側面と切り離せない象徴的な、しかも歴史的かつ普遍的な意味を持つ問題となり始めていた。それゆえ、全ての心的エネルギーを生物学的な性的リビドーに帰し、神経症の原因を個人的な性的外傷のみに限定するフロイトは、批判の対象になりつつあったのである。「まだうまく往生できない」亡霊として登場したフロイトは、「現在」生存しているにも拘わらず、ユングにとって彼が既に影響力を失った「過去」の人であることを示している。しかも他人の無意識の中に秘められた性的動機を発見して満足している姿に、ユングは彼に対する自分の強い批判を自覚して驚いたのである。つまり、この夢は「息子」ユングが「父親」フロイトへの批判を強め、将来二人の関係が決裂するであろうことを暗示するものであった。

それにひきかえ、ピュー氏は「語り手」が敬意を払わずにはいられない威厳をもって本物の「過去」からよみがえり、「現在」の「息子」を鼓舞してヘスターの生涯の作品化を命じ、「未来」へと

導くのだ。また私見によれば、テキスト『緋文字』のピューリタン「共同体」と「語り手／作家」の父方の先祖が、自然と直結した彼女の豊かな女性性を抑圧する硬直した父権的価値観を代表しているのに反し、テキストの新たな父神はディムズデイルを通して、彼らが排除しようとしたヘスターの女性性、あるいは「太母」性に偉大な要素を見出して聖母イメージを与え、これを受け入れている。同様に、ピュー氏が「息子」たる作家に世間に出すよう託した題材は、ヘスターの豊かな女性性ゆえの苦悩に満ちた生涯であり、この「父親」も埋もれかけていた女性的価値を掘り起こして再評価しようとするのである。確かに、この仕事は姦通の罪にまつわるものではあるが、彼は決して「世間の嫌な面を見たということだけで嬉しく、かつ満足げであった」のではなく、逆に性的な罪と罰の物語の中に後世に伝えるべき「人間の心の真実」<sup>6</sup>を認め、その貴重な価値の再生を望むのである。ユングの夢に出てきたフロイトと「語り手／ホーソン」の白昼夢に登場するピュー氏は、共に性的な罪、あるいは罪意識に関わる仕事を携えて「息子」の前に現われながら、その仕事内容についての見解は明らかに正反対であり、それに応じて「息子」の反応も批判と共感に分かれる。ホーソンにとっても性的なテーマ——特に近親相姦——は、生涯にわたって拘り続けたものである。私見によれば、既に述べた如く、それは母、姉妹、母方の先祖にまつわる様々の個人的感情が絡まりあった「母なるもの」に関するユング的な「コンプレックス」の産物であったと考えられるが、当然ながら集合的無意識の母元型、あるいは「太母」イメージの活性化を招かずにはいなかったであろう。『緋文字』を例に挙げるとすれば、ロマン主義の洗礼を受けた作家として、ヘスターに具現される巨大な「母なるもの」、あるいは「太母」イメージをピューリタンの枠組みに閉じ込めて完全に断罪することができなかったのは当然だが、「森」への「夜の航海」に描かれる彼女の輝くような女性性とそれを現実に統合する抑制の効いた結末は、作家が元型的な「母なるもの」の両義性を知りつつ、最大限にその肯定的要素を汲み上げようとしたことを示唆しているのではなかろうか。「母なるもの」へのこのような複眼的な視点を持ち、作品化によってそれを19世紀の父権的文化の中に組み込もうと働きかけるピュー氏は、「母なるもの」と「父なるもの」の統合へと「息子」を先導する「父親」であると言えよう。ユングがやがて「父親」フロイトと訣別し、彼を「過去」に置き去りにしたことは、彼がその時点でのユングの「自己」たりえなかったことを示している。（しかしながら、後年彼の無意識から現われるフィレモン像の中にフロイトが融合されているらしいことは、後にユングが彼を「自己」イメージに取り込んだことを暗示しているのだが。）それに反し、ホーソンはピュー氏の後継者となり、『緋文字』によって築いた偉大な作家としての道を最後まで歩みきったことを考えれば、ピュー氏はユングのフィレモンに相当するホーソンの「自己」像だったと言えよう。

では、なぜホーソンの「理想の父親／自己」イメージが、ネガとポジの関係にせよ、ユングの父親像が登場した夢と同じく、税関に現れたのであろうか。この税関もまた、意識と無意識の境界を象徴しているのであろうか。確かに、当時作家はセイラム税関に勤務しており、「税関」はテキスト『緋文字』の序文として自伝的なメタ・フィクションの体裁をとっているもので、そこを舞台にするのは当然といえば当然であろう。しかしながら、父親像が税関の役人の亡霊でなくてもよいし、テキスト『緋文字』執筆のきっかけを税関に設定しなくてもよいのではなかろうか。ここで注目す

べきは、舞台がセイラム税関、即ちセイラムと外界を隔てる境界であることだろう。セイラムは作家の故郷であり、父方と母方の先祖が初めてアメリカに住みついた場所であり、全国で最も古い植民地の一つであったが、流通の要所として栄えた港町の過去の華やかさは見る影もないほどさびれ、世間から忘れられたような侘しい空間として描かれている。つまり、作家の、ホーソーン家の、そしてアメリカという若い国家のルーツともいべき土地であり、個人的にも集合的にも歴史の重みが覆い被さり、過去の幻影がさ迷っているような町、しかも時の流れから取り残されたような零落ぶりが孤立したイメージを強め、過去の影響力を際立たせるような空間であった。過去はいつか意識から遠ざかって忘却の彼方へ、無意識の暗闇へと消えていく。とすれば、そのセイラムと外界を分ける税関は、地理的・物理的な境界であると同時に時間的・心的な境界でもあると言えよう。つまり、「セイラム——過去——非現実——無意識」の連想に対して、「19世紀の外界——現在——現実——意識」といった連想が成立つのではなかろうか。即ち、セイラム税関は過去と現在、現実と非現実、意識と無意識とを隔てる、と同時に両者が出会う境界に最適のメタファーとなるのである。ホーソーンは意識と無意識を扱う心理学者ではなかったが、彼の出自と環境と天才的な感受性がこのメタファーを生み出し、最大限に活用したに違いない。

更に、このような境界は、「語り手」が自らのロマンス創作の秘密とでもいべき想像力の働きについて述べた箇所を連想させる。即ち、「月光」に照らされて「我々の見慣れた部屋の床がどこか現実の世界とおとぎの国とのあいだの中立地帯、現実のものと想像のものが一緒になり、それぞれに相手の性質がしみこんでくるような場所」となる時、それこそ「ロマンスの作者が彼の幻想の客人たちと親しくなるに最もふさわしい環境」なのだと言ふ。(SL35, 下線は筆者)これが、彼の有名な「中立地帯」であるが、「現実の世界」を「意識の世界」や「現在」に、「おとぎの国」や「想像のもの」を「無意識の世界」や「過去」に言い換えることも可能であろう。こうして、セイラム税関は、とりわけ無用になった過去の書類や資料が雑然と保管されている二階の非現実的な部屋は、テキスト『緋文字』の17世紀の物語世界（無意識）と19世紀の読者の現実（意識）を橋渡しする「中立地帯」として立ち現われる。そして、「語り手」の「父親／自己」像たるピュー氏はその「中立地帯」に君臨するにふさわしい税関監督官として登場し、現在と過去、現実と非現実、意識と無意識を新たな視点から結びつけるべく、無意識の中に葬り去られようとする物語を再び意識化する仕事を「息子」に委ねたことは非常に意味深い。即ち、ユングとホーソーンにとって、無意識と意識の「中立地帯」で無意識から新たな価値を意識に汲み上げる仕事へと彼らを導くのが、「自己」の役割であることが解るのである。ここでもまた、彼らの父親たる「自己」は「意識／父なるもの」と「無意識／母なるもの」の統合を目指して働くのである。

以上のことから、ユングとホーソーンにとって「理想の父親／自己」像に共通点があることが解る。それは、①ユング的な「個性化過程」の道案内者として、人格の全体性を実現するような未来の方向性へと彼らを導く役割を果たしていること、②性的な問題を西洋的思考の土台を成すキリスト教——二人ともプロテスタントであった——の枠組みのみで一面的に捉えるのではなく、複眼的な視点からその肯定面をも受け入れ、「母なるもの」と「父なるもの」との統合を目指すこと、③無意識と意識の「中立地帯」で無意識から新たな価値を意識に汲み上げる仕事、即ち意識と無意識

の統合へと彼らを導くこと、の3点である。そして、当然ながら、「意識／父なるもの」と「無意識／母なるもの」を統合し、「息子」を人格の全体性の実現へと先導するという意味で、3点とも結局は同じことを別々の側面から表現しているに過ぎないのである。「父なるもの」と「母なるもの」に着目した考察によって、ホーソンとユングにかなりの共通点があることが明らかになった。しかしながら、前者は19世紀初期から中期にかけて、後者は19世紀末から20世紀中期まで生きた人である。年齢にして71歳の開きがあり、前者が亡くなって11年後に後者が誕生した。前者は遺伝学はもちろん、フロイトやユングの心理学も知らないのである。にも拘わらず、真に共通点があると言えるのであろうか。文化のおよび時代的な背景に少々触れて結びにしたい。

#### < 4 > 時代思潮

二人が共有した思想には、18世紀後半の啓蒙思想、メスメリズムとそれにつながるスピリチュアリズム、19世紀のロマン主義が挙げられる。そして、重要なことは、これらがホーソンはもちろん、20世紀を生きたユングにとっても非常に大きな影響を与えていることである。チャレットと渡辺氏は、既に催眠術の先駆はメスメリズムに見られるのだが、それがトランス状態を媒介に19世紀のスピリチュアリズムに結びついたと説明する。そして、スピリチュアリズムの隆盛は、科学的自然主義とキリスト教の葛藤を前提に、科学と宗教の両立の可能性を求める民衆の予感を土台としていたというのである。それゆえ、スピリチュアリズムの研究者には聖職者の子弟でありながら科学者であった人が多く、ユングもその一人であったという。(チャレット15-84, 419) 確かに、彼は牧師であった父の信念を欠いた生き方の悲惨さを見て育ったがゆえに、時代におけるキリスト教の動揺を誰より明確に感じ取ったに違いない。だからこそ、それに代わるものとして、母や母方の親族、そして自ら体験していた超常現象を宗教と科学の両立というスピリチュアリズムの枠組みの中に位置付けることができれば、自らの内的分裂を修復することができると思ったのであろう。なぜなら、彼の内面は啓蒙思想の影響を色濃く受けた科学者的な「人格 No.1」と、時間を超越した霊的な「人格 No.2」に分裂していたからである。更に林氏によれば、全体性を実現していく「個性化」や集合的無意識の普遍的な元型の概念は、全てのものに原型の存在を想定し、それが順次開花して全体性を実現するという目的論的な見方をするロマン主義——特にそのような過程を無意識が意識化する過程と捉えたロマン主義心理学——の考え方に大きく影響されているという。(44-50)

このように、ユングが自らの祖父と同世代であったホーソンと共通する時代思潮に深く影響されていたのは、彼の育ったバーゼルの性格にもよるであろう。バーゼルはスイスの古い歴史を持つ都市で、ユングは父方、母方の両方ともが古い名家の家系であり、自身も18世紀から19世紀初頭にかけての著書に精通していたと語っている。(『自伝』① 231) 即ち、年齢の差にも拘わらず、彼らの知的風土は意外と似ているのかもしれない。いずれにしろ、ユングは西洋近代の自我偏重の合理主義と、いきいきした無意識と切り離された父権的キリスト教を批判し、「母なるもの／無意識」を統合することによって人格の全体性を実現することを目指した。この経緯からは、スピリチュアリズムとロマン主義の影響が啓蒙思想を凌駕しているようにも思われる。一方ホーソンもセイラ

ムという歴史の古い、峻厳なピューリタンの伝統を継承する町の抜きん出た古い家系に生まれ育ち、想像力の枯渇した冷酷な父権的ピューリタンと自我肥大した科学者を批判し、彼らに統制された現実には飽き足らず、「魔法の月光」に照らし出された現実と非現実の会おう「中立地帯」に、「人間の心の真実」が浮かび上がるロマンスの世界を求めたのである。彼等の求めたものは一見非常に似通っているように見えるが、そう断言するには更に詳細に分析しなければならない。また、彼らの故郷や時代思潮との関わりとその影響、そして特にホーソーンのメスメリズムやスピリチュアリズムとの関わりをユングと比較しつつ考察する必要があるが、稿を改めて論じたい。

---

 註
 

---

<sup>1</sup> この点については以下の拙論で論じている。

拙論(1):「ディムズデイルの精神的変貌——自我発達の元型的プロセスについて——」鹿児島女子短期大学紀要 第26号, 1991.

拙論(2):「ヘスターとプシケー——『緋文字』に潜む女性的心理発達のプロセス——」鹿児島女子短期大学紀要 第29号, 1994.

拙論(3):「*The Scarlet Letter* における Chillingworth の両義性——「悪魔」と「神の使者」——」鹿児島女子短期大学紀要 第30号, 1995.

拙論(4):「英雄神話『緋文字』の意味——執筆の私的要因と社会的要因——」鹿児島女子短期大学紀要 第31号, 1996.

拙論(5):「『自己』元型像としての Pearl——元型の対立と統合——」鹿児島女子短期大学紀要 第33号, 1998.

拙論(6):「『緋文字』に秘された新たな神話——女性性と男性性の統合——」鹿児島女子短期大学紀要 第34号, 1999.

拙論(7):「『緋文字』における「夜の航海」——ヘスターとディムズデイルの「個性化過程」——」鹿児島女子短期大学紀要 第36号, 2001.

拙論(8):「神話的イメージの連鎖——ヘスターとディムズデイルの「夜の航海」を中心に——」鹿児島女子短期大学紀要 第38号, 2003.

<sup>2</sup> Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*, Vol. I of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Roy Harvey Peace et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-78. p.9. この作品からの引用はすべてこの版により、以下 SL と略記。日本語訳は刈田元司訳『緋文字』(旺文社文庫, 1972), 八木敏雄訳『完訳 緋文字』(岩波文庫, 2002) を参照させていただいた。

<sup>3</sup> 地下の一室に黄金の玉座があり、巨大なファロスが上に座している。恐怖で動けないユングに外から「そう、よく見てごらん、あれが人食いですよ」(29)と叫ぶ母の声が聞こえ、恐怖のあまり汗びっしょりで目覚めたというもの。

<sup>4</sup> 太陽の輝く大聖堂の広場。ユングは急に考えてはいけなない想念が浮かぶのを感じて思考を停止させようとするが、3日目の夜、ついに苦しさのあまり、すべてを神に委ねる。すると、「神は地球のずっと高い所で、黄金の玉座に坐っており、玉座の下からはおびただしい量の排泄物が、きらめいている新しい屋根の上に滴り落ち、屋根を粉微塵にこわし、大聖堂の壁をばらばらにこわす」(60-7)という光景が目には浮かんだ。ユングは、生きた神の恐ろしい一面を見た体験と解している。

<sup>5</sup> 実のところ、この伝説はユング自身が作り出した「神話」である可能性もあるという。(チャレット21-2)更にユングは自らをゲーテその人の生まれ変わりだと信じるまでに至ったという。(ノル32)「アニエラ・ヤッフェによるユングの未公開インタビューの草稿がワシントン DC にある国会図書館のポーリング財団資料中にある。しかしそれらから直接引用することは許可されていない。」(同 注 第1章36)

<sup>6</sup> Hawthorne, Nathaniel. *The House of the Seven Gables*, Vol. II, p. 1. SL と同じくオハイオ版による。

---

 参考文献
 

---

Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel*. Illinois: Dalkey Archive Press, 1997.

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*, Vol. I of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Roy Harvey Peace et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-1978.

\_\_\_\_\_. *The House of the Seven Gables*, Vol. II of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.

- Ed. Roy Harvey Peace et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-1978.
- Neumann, Erich. *The Origins and History of Consciousness*. Princeton, N.J.: Princeton UP, 1954-1993
- Young, Philip. *Hawthorne's Secret—An Un-Told Tale*. Boston: David R. Godine, Publisher, Inc., 1984.
- アーリッヒ, グロリア・C 『蜘蛛の呪縛——ホーソンとその親族——』丹羽隆昭・大場厚志・中村栄造訳 開文社, 2001.
- 青山義孝 『ホーソン研究——時間と空間と終末論的想像力——』英宝社, 1991.
- 岩田強 「はらからの絆——ホーソンの描かなかった<愛>——」光華女子大学英米文学会編 『夢の変奏——英米文学に描かれた愛——』, 大阪教育図書, 1994.
- ヴェーア, ゲルハルト 『C. G. ユング記録でたどる人と思想』安田一郎訳 青土社, 1996.
- 大杉博昭 『灯心記——作家・詩人論他十二章』近代文芸社, 1990.
- 神徳昭甫 『炎と円環——ホーソン文学の両義性——』株式会社ニューカレントインターナショナル, 1992.
- チャレット, F. X. 『ユングとスピリチュアリズム』渡辺学・他訳 第三文明社, 1997.
- ノイマン, エリッヒ 『意識の起源史』(上)(下) 林道義訳 紀伊国屋書店, 1984.
- ノル, リチャード 『ユングという名の<神>』老松克博訳 新曜社, 1999.
- 林道義 『ユング思想の真髄』朝日新聞社, 1998.
- フィードラー, レスリー・A 『アメリカ小説における愛と死』佐伯彰一・他訳 新潮社, 1989.
- ユング, C. G. 『ユング自伝——思い出・夢・思想』1・2 アニエラ・ヤッフェ編 河合隼雄・他訳 みすず書房, 1972.